

会 議 記 録			
会 議 の 名 称	全 員 協 議 会	場 所	全 員 協 議 会 室
		担 当 職 員	熊 谷 夏 子
日 時	令和 4 年 1 月 1 7 日（月曜日） 開 議 1 3 時 3 0 分 閉 議 1 4 時 4 4 分		
出 席 議 員	議員 2 2 名（田中議員、木村議員 2 名欠席）		
執行機関出席者	桂川市長、石野副市長 （産業観光部）由良部長 （商工観光課）三宅課長、元古副課長、橋本主幹 京都先端科学大学学長 前田正史 様 他 5 名 亀岡商工会議所会頭 川勝啓史 様 他 1 名		
事務局出席者	山内議会事務局長、井上議会事務局次長、加藤副課長、佐藤主任、小野主任、熊谷		
傍 聴	可・否	報道関係者 1 名	

会 議 の 概 要

開 議 1 3 : 3 0

1 開 議

〔福井議長 開議〕

〔事務局長 日程説明〕

2 行政報告

○亀岡市・京都先端科学大学・亀岡商工会議所の産学公連携事業

「オープンイノベーションセンター・亀岡」の整備・運営について

〔桂川市長 あいさつ、説明〕

〔京都先端科学大学学長 前田正史様 説明〕

〔亀岡商工会議所会頭 川勝啓史様 説明〕

〔質 疑〕

<長澤議員>

これまでは産学連携というと大学と個々の企業の協力関係という色彩が濃かったように思う。今回の構想は亀岡商工会議所の参画も得て、面的な広がりをもってい

る。しかも食品産業の開発や共同研究を包み込むような形で、機械、電子、電気工業の分野も含めて良い広がりを持ったものとして進めていかれるという印象である。そのような理解でよいか。

<前田学長>

言葉が足りなかったかもしれない。これまでは個々の教員と個々の関係会社、あるいは農業事業者の方との共同研究、あるいは京都府の補助金を利用した開発などを行ってきた。イノベーションセンターができて、そういった研究や開発が蓄積できるようになった。私はセンターが市の公民館的な場所になればよいと思う。いろいろな分野の方がいて、みんながそこに集まり、そこに行けば様々な情報が入ってくるという場所になればよいと考える。農業分野では温室の中で飛ばすマイクロドローンなどの活用も進んできている。大学は農産物の生産現場を知っているわけではないので、農業の方に来ていただいて説明いただいて、それを我々の持っている知識とつなげる。そのコーディネーションを面的、立体的にこのセンターで行っていききたい。大学教授というのは固有の専門に関してはエキスパートだが、何かを組み合わせる自分でやることに関しては、必ずしも得意な先生ばかりではない。センターでそれをコーディネーションして、議員が言われるように包み込むような開発につなげていきたいと思う。

<福井議長>

長澤議員よろしいか。

<長澤議員>

よい。

<福井議長>

他には。

<藤本議員>

市長の説明を聞いて、産学公連携の形ができたと思った。亀岡市が進めているSDGsとも非常にマッチする内容だと感じた。かつて、永守会長が京都先端科学大学を世界の10本の指に入る大学にするとと言われてエキサイティングな話をされていた。ちょうど去年に京都先端科学大学の坂本先生が京都発地域経済の再考という本を出版された。亀岡で留学生の受入れや研究者や工場で働く方の受入れも当然だが、日本電産さんの新しい工場もぜひ研究から発展して、亀岡で生産できるような体制と亀岡の今ある企業の中から生産部品の供給関係をしっかり結び付けていただければ、亀岡にとってとても有益な事業になると考えるがいかがか。

<前田学長>

杓子定規なことを言うようだが、日本電産の永守と京都先端科学大学の理事長の永

守とは別人格である。日本電産の事業が今後どうなっていくかはコメントする立場ではないので、その点は容赦いただきたい。理事長は私に、太秦に主な拠点が移ったときに、亀岡キャンパスをどうしたいかと聞かれた。私としては産学公の共同の場として、これだけ恵まれた場所はないので、ぜひその方向で活用したいと申し上げた。そのとき、理事長は事業家なので、使わない資産は持ちたくないと言われた。しかし、お前がそう言う以上はそこを十分活用して大学、地域の発展につながるようにしなさいと指示された。その後EVの開発について、日本電産と私ども大学とで共同研究を開始した。その場として当然太秦ではできるわけがないので、現在も亀岡キャンパスでかなり大規模な共同研究を実行している。その結果、今中国で生産しているような電気自動車の開発が進んでいると聞いているが、それは会社の中での話である。共同研究で出てきた問題等について画一的な支援をしているし、そのまま公開できるものは論文で公開している。議員が言われるような効果は、長期的には日本電産に限らずいろいろな企業の発展に寄与できると考えているが、私は直接的に企業と大学とが密接にということは考えていない。

<福井議長>

藤本議員よろしいか。

<藤本議員>

ぜひ市長の考えも聞かせていただきたい。

<桂川市長>

大学の研究と今後の地元産業界の連携ということだが、日本電産さんだけでなく、多くの先端技術を必要とする企業との連携を持てる場づくりになればと考えている。篠町でも工業団地の整備を行っている。また、亀岡インター周辺地区でも行っていく。そのような場所づくりを行政として行っていきながら、京都先端科学大学で実証実験を通じて新たな取組が生まれてくるだろうと考える。そして最終的には地元にも拠点を置いていただけるような形で進めていければと思っている。よって、一企業だけではなく、イノベーションセンターで起こり得る科学技術を活用した産業界の活性化ができればと考える。

<福井議長>

藤本議員よろしいか。

<藤本議員>

亀岡市の産業界の活性化にも随分と貢献していくものだと思うので、会頭から思いを聞きたい。

<川勝会頭>

大きな期待を抱いている。藤本議員が言われたようなことに対して危惧されている

ところもある。どうしても京都先端科学大学という、今言われた方のイメージが強い。そちら一辺倒で、このイノベーションセンターが走るということは困るので、一企業の利益のためだけではなく、亀岡のいろいろな分野での利益を考えて行動していただくイノベーションセンターであってほしいという意見が亀岡商工会議所では出ていた。

<齊藤議員>

やっとこの日が来たと卒業生としても非常に嬉しく思っている。イノベーションセンターはオープンなので、どなたでも入っていただけるという理解でよいと思うが、消費者に向けてのプラットフォームづくりが非常に大事だと考える。また、川勝会頭が言われるように、以前のイメージはあるが、オープンイノベーションセンターによって、世界に発信できるような企業が生まれる取組をしていただきたい。その点についてお話があればお願いします。

<前田学長>

卒業生に質問いただいたということで、ぜひ亀岡キャンパスに来ていただきたい。案内させていただく。コンシューマーに直接接触するのは事業会社、あるいは農業事業者の方である。大学の人間は直接お付き合いする機会があまりないので、コンシューマーの声を事業者を通じて聞かせていただきたい。新しいイノベーターがここから出ることを私も願っている。ただ大学は唯一のプレーヤーではない。私どもは土俵を用意する立場である。行司ではなく相撲も一緒にとるが、相撲をとっていただく方はやはり地元の方だと思っている。力士が足りなければよその部屋から借りてくる、あるいは移住していただくというのがやり方だと思っている。新しいベンチャーで生き残りが出てくることを大いに期待したい。

<齊藤議員>

ローマ時代から産業革命までは2,000年ほどかかっている。しかし生産性は2倍ほどしか上がっていない。これからは桁の違う時代になると考える。1年5年10年ということではなく、5年すぐに100年というイノベーションになればよいと思う。今回の取組によって、亀岡に移住されたり起業されたりする方が増えることを非常に望んでいるのでよろしくお願いします。

<木曾議員>

学長からいろいろな取組を聞かせていただいて、非常に嬉しく思う。先ほど川勝会頭からあったように、永守さんは個性が強い方である。私は企業として取引もさせていただいたのでよく存じ上げている。学長も言われたように一企業の企業人としてはすばらしい方であると認識している。しかし京都先端科学大学としてイノベーションセンターを核に、いろいろな技術開発をしていく中で大学と地元企業とがど

のようにコラボしていくのが非常に大事だと考える。地元企業の中には日本電産さんの取引だけではなく、例えば京セラ、オムロン、村田製作所等、京都を代表する企業と取引をされているところがほとんどである。いろいろな垣根を越えて、いろいろな技術を集約して、さらに発展させて、一企業のものではなく、付加価値のあるものとして、環境に優しい技術改革をするためのイノベーションの拠点にしていきたいと考えているが、そのような考えはお持ちか。

<前田学長>

理事長は大学の運営に関して、私の判断を覆すことは一度もなかった。私は大学の活動を全て理事長に報告しているわけではない。今回のイノベーションセンターを作るにあたり、理事長に概要説明はしているが、個々の具体的な話については説明する必要もないと思っている。アウトラインは理解してもらっているので、このまま進めていく。議員の懸念に関しては、全く問題ないと言ってよい。理事長自身もこれまでから京セラの稲森さん、村田の先々代の社長さん、オムロンの立石さんのような京都の経済人に自分は育ててもらったと言っている。よって、今度は逆の立場で、経営者の子弟、経営者になろうとしている人、あるいはエンジニアを育てていきたいと言っている。今回4月からビジネススクールでMBAを開講する。ここに登壇していただく教員には今議員が言われた企業の方も入っている。そもそも本ビジネススクールにおいでになる方は、オムロン、堀場製作所、島津製作所の方であり、理事長と個人的にうまくいっている方、そうでない方も来ていただいているので懸念は無用だと思う。理事長は大学を応援し、大学に資金を出してくれているが、これと日本電産との営業活動とは全く無縁だと考えていただいて結構だと思う。したがって、私が議員の質問に答えるならば、日本電産の敵対会社であろうとなかろうと、遠慮なく来ていただきたいと思っている。

<木曾議員>

決して永守会長に対してのイメージを話しているのではなく、イノベーションセンターを活用するには垣根を越えた考え方が必要だと思っている。藤本議員が言われたように日本電産に対する過大評価が非常に多いので、ここに入れば永守さんにいろいろしてもらえるのではというイメージが強い。そうではないということを踏まえて、もっと先を見据えた技術開発について、精華町の学研都市のような研究所ともコラボしながら、日本の国家として、また亀岡の地域として発展させるような形に持って行ってほしい。地元企業もそこに参画して、東大阪市のようなロケットを飛ばすくらいの力を持ってお互いの研究ができるような方向性を作っていただきたい。大学の関わり方、行政の関わり方、企業としての関わり方を住み分けながら、お互いに協力することはあっても、お互いの分野を邪魔せずに、自由にできる

ような研究機関になってほしい。

<前田学長>

私は、大学の機能は非武装地帯と言っている。日鉄や中国、韓国の鉄鋼メーカーが大きな争いをしているが、私が学生の頃は、彼らの技術者も含めてディスカッションしながら技術開発していた。その結果として大きなイノベーションが起こった。議員の言われた精華町のチームは我々の先輩であるが、そこまで地域密着型ではないと思っている。彼らもお客様との距離をどのように取るか苦心されている。私も当然同じである。地元企業が何を願っていて、何をしたいのかをよく伺った上で、全ての分野においてハードルを設けなくて、非武装地帯でいろいろな知識を交換できればと思う。その上で、最先端技術がもしも必要ならば、それを誘導していく。日々開発されている技術は横展開するだけで、大きな進展があるものも多数ある。そのような足元を見つめた活動にも注力していきたい。

<木曾議員>

この事業を完結させるためには京都産業21の関わりが非常に大切だと思う。それにはどのように行政と大学、地元企業が関わっていくのか。京都府との連携をしっかりと取っていただけるようお願いしたいがどうか。

<前田学長>

京都産業21との連携については、協定書の文言の中にも入れている。京都の企業が亀岡に来ていただけるようお願いしつつ、連携を深めていきたいと思っている。

<木曾議員>

川勝会頭をお願いしたい。京都産業21の拠点を亀岡に持ってきていただいて、分署でもよいので、京都産業21を巻き込んで、亀岡から発信できるような形のものを作っていかなければならないと思う。そうすれば地元企業は積極的に賛同し応援もできるし、事業展開についてお互いに協力できると思う。その点について川勝会頭はどうか。

<川勝会頭>

以前、京都産業21は亀岡にあった。確かに今議員が言われたように、イノベーションセンターができることをきっかけに、本体は難しくても、亀岡に分署を持ってくることはできると思うので、部会で話をして積極的に要望していきたいと思う。

<福井議長>

計画本体に対する質疑はないか。

<木曾議員>

令和4年は設備に2億円、運営に2,000万円とあるが、令和7年まで運営費について3,000万円と記載されている。一般財源の問題も含めてどこまで亀岡市

が関わっていくのか。令和7年の段階で一旦整理をして、それ以降はどうなるのか。その点について市長はどう考えているか。

<桂川市長>

トータルで事業試算は亀岡市として4億円を拠出していく予定である。令和4年から7年にかけての事業に対してということで、当初2年間は施設整備を含めた形で大学に拠出する予定である。財源は基本的には寄附を充てる予定で準備している。京都府との連携の中で補助の申請も現在している。特に令和6年、令和7年は3,000万円ずつの運営費を拠出し、そののちは自立していけるように促していきたい。しかし市としては、イノベーションセンターへ職員を派遣するので、その費用は引き続き必要となる。京都産業21ともしっかりと連携できるような仕組みづくりを京都府とも協議しながら進めている。南部は学研都市、北部は北部の拠点があるが、京都中部にはない。企業の研究機関やサポート機関が欲しいという要望を地元の亀岡商工会議所や事業者から伺っている。今回の京都先端科学大学と亀岡商工会議所の産学公連携によって、そのような拠点作りをすることで、京都産業21からも支援をより受けやすくなる状況になると思う。試算としては令和7年までと考えている。今後の事業展開を見ながら、そして議会にも相談しながら進めていきたい。

<木曾議員>

ふるさと納税は恒久財源ではない。それなりの事業計画を、議会や一般市民に対して説明する必要がある。例えば亀岡市から職員を派遣するのではなく、企業や亀岡商工会議所の職員を派遣いただくなどの財政支援も検討していただきたい。その点はいかがか。

<桂川市長>

当初は簡単に良い人材がマッチングできるとは思わないので、市から派遣しなければならないと思っている。議員が言われたように、今後は企業の中から任用いただけるような形になれば、市としても任用の予算を確保していくことになると思う。亀岡商工会議所や大学と連携しながら、事務局の人材の目途もつけていきたい。

<浅田議員>

1ページの4番の産業技術普及・啓発事業についてだが、小・中・高校生や市民を対象に啓発していくことが一番重要だと考える。最後のページにイメージマップもあるが、完成するまでに時間がかかると思う。啓発事業については、どのようにお考えか。

<前田学長>

啓発事業に関しては、既に大学が中心となって南丹地区を対象に出前事業を始めて

いる。小・中学生に広めるとなると、もう少し計画を立てなければならないが、高校の先生方と相談しながら進めていきたい。講話関係は本学の教員が出張授業で、南丹地区の高校の教室を既に回り始めている。その延長でスタートできると思っている。市民に対してはもう少しテーマが固まってきたら、公開講座をできたらと考えている。今後、イノベーションセンターでいろいろな事業が動き出したら、それに合わせて市民にお話していきたい。私ども大学としては、小学生の頃から、大学に進学すればどのような自分の未来が見えるのかを知っていただきたいので、大学のキャンパスに小・中学生に来ていただくことも願っている。そのような活動もしていきたい。

<浅田議員>

技術を見せるだけで、小・中学生は興味を持つこともあるので、ぜひともよろしく願います。

<福井議長>

他に質問はないか。なければこれで質疑を終わる。

14 : 42

〔執行部等 退室〕

14 : 43

3 その他

<福井議長>

事務局から何か連絡事項はあるか。

<事務局長>

このあとの会議予定を連絡させていただく。午後3時からここで政策研究会が開催される。メンバーの方は出席をお願いします。

<福井議長>

よろしくお願いします。それでは全員協議会を閉議する。

閉議 14 : 44